

乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

特集

いま、倉橋と出会う7  
「うっかりしている時」

7  
2010



## フレーベル館から新しい月刊保育誌が誕生!

園の未来をデザインする

## 保育ナビ

理事長、園長、副園長、主任など、保育現場をマネジメントするすべての保育者のための月刊保育誌が誕生しました。

文部科学省や厚生労働省の動向など、保育を取りまく政策レベルの話題を含め、これから園の未来を担う保育者にとって必要性の高まる情報を、わかりやすく紹介します。

26×19 cm 80ページ 定価950円(税込)



### ① 他園の様子がよくわかる 「特集1」500人アンケート&座談会 「特集2」実践報告

4月号のテーマは「選ばれる園になるために」。少子化の中、今後の園のあり方を考えます。

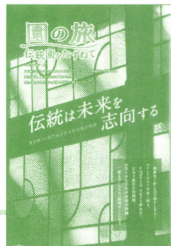
5月号／「子育て支援」、6月号／「感染症」です。その他、「研修のあり方」「評価と公表」「保護者対応」などのテーマを取りあげます。



### ③ グラビアページ 園の旅 ～伝統園をたずねて

全国60か所以上の保育風景を撮影してきたカメラマン・渡辺悟が、各地の歴史ある園をたずねます。園舎や子どもたちが生活する姿から、園の歩みが感じ取れます。

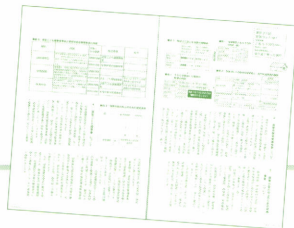
4月号は、お茶の水女子大学附属幼稚園です。



### ② 園経営に直結する情報満載

《保育コンサル》  
「園経営の扉をひらく! 保育マネジメント講座」  
《保育最前線》  
「国の動きを読む! 研究者の目」  
《保育アラカルト》  
「ソーシャルワーカーの園支援ノートから」など

園のマネジメントを考える上で欠かせない「予算」や「人」の管理、行政の動きなどを、《保育コンサル》《保育最前線》《保育アラカルト》のコーナーに分け、わかりやすくお伝えします。



### 年間購読

「保育ナビ」を1年間お買い求めいただく場合は、年間購読をおすすめ致します。詳しくは、下記までお問い合わせください。



# 幼児の教育

第109巻 第7号

---

## 目次

---

● 巻頭言 ●

子どもと大人の「共生」を考える — 身体性の視点 根ヶ山光一 4

● 特集 ●

いま、倉橋と出会う 7 「うっかりしている時」 8

実践の中で味わう 榎田正子 9

「うっかりしている時」から教わった幼児教育の魅力 杉原 徹 12

「うっかりしている時」とチャンスの訪れ 石塚美穂子 18

● 保育の創意工夫 7 ●

園庭の土山 前原 寛 24

● 幼稚園の源流を求める旅 森有礼の第二次在米時代 (5) ●

アメリカでの新たな出会い 国吉 栄 28

---



乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

第109巻 第7号

---

---

● 園のくらしを育む 4 ●

幼児とアート (2) — ものとアート — 秋田喜代美 ..... 32

● 絵本で子離れ (2) ●

脱皮と追い風 松井るり子 ..... 36

『豊田英雄と草創期の幼稚園教育』の出版まで 前村 晃 ..... 42

● 保育の現場から ●

居場所になるということ 伊集院理子 ..... 46

アフリカの学力調査からわかること 佐々木真千子 ..... 52

● お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (43) ●

日常性から保育カリキュラムを考える (1)  
附属幼稚園『しいのみパーティー』の姿から 宮里暁美 ..... 58

---

---



# 卷頭言

## 子どもと大人の「共生」を考える

### — 身体性の視点

根ヶ山光一

子どもには、未熟で非力というイメージがあります。無力な子ども像は、大人による保護や導きを必要とする子ども像でもあります。最近の子どもをめぐる事件、事故の報道などを見ると、そういった子ども像が強まっているような気がします。

子どもが母親のお腹の中で育つ時、母親はしばらくの間その存在に気づきもしません。それにもかかわらず、母体と子どもの身体の間では、ある種の「コミュニケーション」がとり交わされ、子宮壁への着床、胎盤の形成とそれに続く栄養や酸素の受け渡しなどがなされます。また、出産や哺乳についても、そこには免疫、代謝や生理的仕組みが複雑にかかわっていて、そのお陰で子どもが円滑に発育します。そこで大事なことは、その身体の関係性において、子どもも親と対等な役割を担っているということです。

子どもは確かに、ある意味未熟で大人の助けを必要としています。しかし考え方を変えれば、子どもは自らの生存のために、そのような大人を操作してその資源を引き出す絶大な「能力」をもっている存在であるともいえます。大人に受動的に育ててもらおう存





在ではなく、大人に能動的に働きかけ、大人に資源を注がせる存在として子どもを見る  
ことができます。しかも大人は、嫌々ではなく喜んでその資源を提供するのです。大人  
と子どもの「共生」関係とは、そういう対等性をさして言っています。その対等性の基  
盤として身体性があるということなのです。

子どもが大人から資源やかかわりを引き出す能力を全身にたたえているということ  
は、見方を変えれば、子どもが大人の育児行動の「教師」であり「ガイド」であるとい  
うことです。子どもの身体に備わった力がそれを導いているのです。たとえば、「抱き」  
を考えてみましょう。親が独力で赤ちゃんを抱いてあげていると思っているかもしれま  
せんが、実は赤ちゃんもその手、足、頭、胴体を使って全身で能動的に「抱き」に参加  
しています。子どもの身体が親から適切な抱き行動を引き出し出している、とすらいえます。  
「哺乳」もしかりで、赤ちゃんが吸うこととおっぱいの出が促されるのです。

進化に裏打ちされた身体に導かれて子どもは要求を出し、外部からのかかわりを拒  
んだり受け入れたりします。それが結果として子育ての方向性をガイドしていることにな  
り、親はそれに導かれて世話をしていきます。これがイヌやネコなどがしている子育て  
の実態です。身体に注目することは、発達が生物学によって下支えされている、とい  
う事実を自覚することでもあります。発達とは、「繁殖」という生物学的現象の心理学的  
翻訳なのです。

ところが人間は、「頭」で子育てするほうにシフトし過ぎてしまいました。親は子ど





もという最も信頼性の高い「テキスト」を横に置いておいて、文字どおりの「育児書」や「医師のアドバイス」などに頼り過ぎてはいないでしょうか？　そこではしばしば、「愛」や「きずな」の大切さが訴えられます。愛とは、関係の心理的側面です。発達心理学でよく言われる「意図」の理解や「心の理論」も心理面に關すること、それは年月の経過を伴う子どもの成長に応じて発達してくるとされています。そこには、未熟から成熟へ、といった上昇的な方向性が想定されています。未熟な子どもが、成熟した大人に導かれ発達を遂げていく、というイメージです。ここにはまた、リーダーとしての親、というイメージも同時に存在しています。それは西洋の個人主義と相性のいい考え方のように思われます。

しかし、子どもの身体にたたえられている生物性は本来自己主張的ですし、親の身体にある生物性と対等な相補的關係にあります。子どもの身体は、大人といい關係を形成すべく、「かわいらしさ」「肌触りのよさ」「いいにおい」などの訴求力を備えています。さらに、どういう触れられ方や味、においを好むかなど、身体が求めるものにも志向性があります。大人の側も、そのような訴求性や志向性に応えるように仕組まれています。生きるための能力として、子どもの關係構築力は大人よりはるかに有能、雄弁だと思えます。このような視点は、西洋の個人主義的な育児観よりも、日本で伝統的に受け継がれてきた、子どもの主体性を尊重する育児になじむとらえ方なのではないでしょうか。

身体はまた、「だるい―元氣な」「眠い―覚醒した」「空腹な―満腹した」といったよ





うに絶えず揺らいでいる存在でもあり、子育てとは、親と子どもの揺らぎ合うアナログな二つの身体の出会いです。そのファジーな身体性を認めることは、子育てにおいて大らかさ、波や揺らぎの許容を意味するでしょう。それも、身体に注目することで見えてくることです。

さらに、身体性のもう一つの特徴は「反発性」です。たとえば、身体には免疫機能というものがあって、それは身体的な自己識別機構なのです。心が自己を識別するはるかに前に、受精した瞬間から始まる自己分化の問題です。その後の出産も、また離乳も、親子の身体の利害が矛盾するため生じる反発性であるということが出来ます。つまり身体は、親和性と共に反発性の源でもあり、親子といえども親和・反発の両方が共存する「ヤマアラシのジレンマ」の関係なのです。私は長年にわたって、親子間の反発性を「子別れ」という切り口から見つめてきており、実はそれが親子の対等な共生関係には必要不可欠な要素であると痛感しているところです。

子どもの主体性を認めて反発性を視野に入れると、それによる親子の相互尊重性が浮かび上がってきます。そのような親子観は、暴力や過保護など、昨今の親子に指摘される問題解決に対する一つの糸口になるのではないのでしょうか。愛だけしか見ないで反発性が生む相互調整過程を無視する「美しい」親子関係像からは、真の「共生」にはたり着けないと思っています。

(早稲田大学人間科学学術院教授)



# いま、倉橋と出会う

倉橋惣三（一八八二—一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問い直す機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

その人の味はうっかりしている時に出る。

うっかりしている時に出る味でなくては、真にその人のもち味とはいえない。

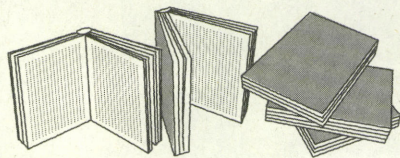
教育の一番ほんとうのところは、屢々<sup>しばしば</sup>、その人のもち味によって行なわれる。まして、相手が、謂わば、最もいい意味で始終うっかりしている幼児たちである場合、我々のうっかりしている時が、如何に教育的に大切なはたらきをなしているかは考えらるる以上である。

うっかりいう言葉、うっかりする動作、出あいがしらに、うっかりと見せる顔。その時出る我々のもち味こそ……

と云って、いくらいいもち味の人でも、うっかりばかりしてはなるまい、と云ってまた、わがもち味をつつもうとして、うっかりしている時の全くないのも、つくろいに過ぎよう。そこでこそ、幼児教育はむつかしいものと、昔も今もいわれるのである。

## うっかりしている時





## 実践の中で味わう

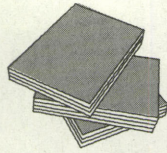
榊田正子

「その人の味はうっかりしている時に出る」と冒頭にあり、「最もいい意味で始終うっかりしている幼児たち」「うっかりしている時が、如何に教育的に大切なはたらきをなしているか」と続くこの文章を、今回私は実践の中で味わってみたいと思った。「うっかりしている」状況とはどういうものであろうか。

また私は、常々、保育者が園の教育理念など大切にしていることをきちんと理解し共有した上で、それぞれのもち味を生かして保育をしてほしいと願い、それを言いもし、期待もしてきた。なぜなら、保育者が生き生きとその人らしくいるところであれば、子どもたちもまた、生き生きと自らを充分に発揮するであろうし、そこに充実した保育実践が生まれるに違いないと、漠然と思っていたからである。さらに、私が今日まで出会った多くの先輩や同僚がそれぞれに豊かなもち味で保育する中で、子どもたちがのびのびと健やかな育ちの姿を表しているのを目の当たりにし、その心地よさを感じてきたからでもある。

さて今回、倉橋の文章に向き合って繰り返し読んでいくうちに、これまで漠然と感じてきた「もち味」への関心が、にわかに大きくなり、さまざまに考える機会となった。もち



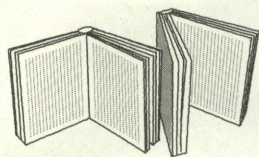


味はまさに固有のものであるから、その中身については、ひと言に言えるものではないが、かといって何でもよいとも思えない。考えていくと、保育の場にふさわしいもち味には、ある基準がありそうに思われる。その基準とは、共に在ることを喜びとする感覚である。それがあつて初めて子どものあるがままの在りようを肯定できるであらうし、倉橋のいう「教育の一番ほんとうのところ」に関与する可能性を有するものでもある。

他方「うっかりしている時」はどう考えられるであらうか。こんな場面が思い浮かんだ。

その日予定されていることを準備するために、子どもたちと一緒にホールの大型積木を片づけていた時のことである。誰かが私の背中に飛びついてきた。片づけることに気が持ちがいついて、背後にまったく注意を払っていなかったので驚いた。「あ、びっくりした。誰かしら？」と肩に回された小さな腕をそつと外して振り向くとA男が笑っている。瞬間的に思い出したのは、その日の登園時、門の所で子どもを一人ひとり出迎えていた私の横を「おはようございます」と言つて通り抜けようとしたA男の姿である。実は通り抜けようとした時に、一步後ろを入ってきた母親に大声で呼び止められ、「A男、こあいさつはちゃんと先生の目を見てしなさい」と言われた。A男はとっさに母のほうを振り向いて立ち止まったものの、タイミングを逃し、気持ちが向けられない様子でそのまま靴箱のほうへと走り去つたのである。背中に飛びつかれ、振り向いてA男の笑みをたたえた目を見た瞬間に、朝以来のA男との気持ちがびつたりと合わさつた感覚を覚え、ああ、この時があつてよかつたという思いがして、A男の肩を抱いた。





保育の場において子どもの思いに寄り添うことを考えていながらも、保育者の気持ちがある。その日の予定や伝えるべき事柄にとらわれていて、本当の子どもの気持ちに気づけずにいる時がある。先の場面でも、予定の流れに合わせて率先して片づけをする姿を前面に出すあまり、側面や背後への気配りが抜け、うっかり「素の私」が出ていたのである。うっかりではあったが幸いなことに、その「素の私」の雰囲気は子どもたちと過ごす日ごろのものであって、違和感を感じさせるものではなく、むしろ親しみを感じさせたようである。だからこそA男は背中に飛びつくことができたのである。さらに考えれば、率先して片づけることに余念がない保育者の前面の姿には、A男が思いを込めて飛びつくことのできる余地も心地よさも見いだせなかったのではなからうか。特別な経過や期待で特徴づけられるものではなく、率直さと親しみが醸し出される日常的な雰囲気こそ、その時々の子どものありのままの思いがそのままに受け止められる余地を有するのである。

このように考えるにいたって、私は保育者のうっかりした部分と、そこに生ずる教育の意味あい結びついた感じがした。

そして最後にもう一度想起したいのが、うっかりした時に垣間見える保育者のもち味の在りようである。前述したように「共に在ることを喜びとする感覚」を基準として、率直さや親しみやすさなどの表現が浮かんできたが、さらにそれらを包み込む「温かさ」を忘れてはならないと、いま強く感じている。



# 「うっかりしている時」から教わった

## 幼児教育の魅力

杉原 徹

### 幼児教育と私

大学院で教育哲学を専攻していた私が、ご縁あつて保育者を養成する短期大学に勤務するようになって、はや四年目になります。いまでこそ養成校での生活に慣れたといえますが、当初は驚くことばかりでした。

教育上のことでは、何といつてもカリキュラムの過密さです。一年生などはほとんど五時間授業です。90分×5がほぼ毎日ですから学生はへとへとです。

そして学外実習の多さ。二年生は六月に幼稚園（四週間）、八〜九月に施設（十日間）、十一月に保育所（二週間）で実習をします。実習から帰ってきたかと思えば、また実習に出かけるような印象です。<sup>注1</sup>

研究上のことでも驚きがありました。幼児教育分野では、実践研究が圧倒的多数を占めているのです。<sup>注2</sup>

私が専攻してきた教育哲学の研究スタイルといえは文献講読が基本ですから、幼稚園や保育所に出かけて幼児を観察・記録したり、保育者からアンケートをとったりというスタイルが主流であることに当初



戸惑ったものです。

ところで、幼児教育の世界に入ったことによる私にとつての最大の収穫といえ、幼児と直接ふれあう機会が多くなったということかもしれません。附属幼稚園に学生を連れて出かけることがあります。が、学生以上に私が子どもたちとのかかわりを楽しんでるような気がします。学生を放っておいて、私が遊びに夢中になっていることがしばしばです。

子どもたちとのかかわりを楽しみながら、一方、幼児教育の難しさを感じます。言葉の獲得途上にある幼児をどのように指導していくのか。学生たちにはたびたび次のように問いかけます。

「小中高大よりも、幼稚園や保育所の先生のほうが大変なんじゃないかな。だって、小学校からは教科書があつて、言葉を使ったコミュニケーションでいいけれど、みんなは漠然とした領域しか手掛かりがないし、言葉による問いかけだけではなく、五感を働かせて身体をしっかりと使つて指導していかなく

ちゃいけないし。幼児教育が一番難しいよねえ?」

私なりにハッパを掛けたつもりですが、学生は、きよとんとしています。こんな調子で、幼児教育の世界で日々奮闘中の私です。

### K君の「うっかり」

倉橋惣三の「うっかりしている時」を、ある学生と一緒に読みました。何かアイデアが欲しい時に、学生の力を借りると思わぬ収穫が得られるということとは養成校の勤務で学んだ教訓です。実際、今回も大きな収穫が得られました。

日ごろからよく話している男子学生K君を研究室に呼び、手始めにK君に実習中の「うっかり」体験を尋ねてみました。すると、彼は子どもの名前の呼び間違いについて話してくれました。

「一週間の幼稚園観察実習の最終日での出来事です。クラスの子の名前をまだうろ覚えで、ある女の子の名前を呼び間違えてしまいました。クラス全員



がそろっている場だったこともあるのか、えらく機嫌を損ねてしまいました。後味悪い実習でした」

K君は「うっかり」をマイナスのものとして認識しているようです。確かに、「一般的に「うっかり」とは、マイナスをイメージさせるでしょう。では、倉橋における「うっかり」はどうでしょうか。

その人の味はうっかりしている時に出る。

うっかりしている時に出る味でなくては、真にその人のもち味とはいえない。

……我々のうっかりしている時が、如何に教育的に大切なはたらきをなしているかは考えらるる以上であろう。

ここでK君に、「うっかりしている時」のコピーを渡し、倉橋のこうした文章に触れてもらいました。

K君はきょんとしています。彼には思いもよらぬ「うっかり」理解がそこにはあったようです。私は

問いかけました。倉橋がここで述べているような「うっかり」体験はないだろうか、「教育的に大切なはたらき」としての「うっかり」で思い当たることはないか。K君は「うーん」としばし悩んだ結果、少し時間をくださいと研究室を出ていきました。

### K君のもう一つの「うっかり」

翌日、K君がやってきて「こんなエピソードはどうでしょうか」と次のような話をしてくれました。

「四週間の教育実習で設定保育をやったのですが、その時にこんなことがあったんです。僕が事前にいるいろいろな野菜、果物の絵を描いておいて、それらを子どもたちに見せながら名前を答えてもらいます。そして最終的に自分の好きな野菜、果物の絵を自分たちで描いてもらおうという活動案を立てていました。準備をすっかりし、活動を始めました。このクラスにも慣れてきていたし、正直言って自信がありました。実際、当初は計画どおり進んでいたんです。



ところが、トウモロコシのところだ……。子どもたちは正しく答えてくれたんですが、僕はつい『そうだね、トウモロコシ、だね』と言っちゃったんです。そうしたら、子どもたちは大爆笑。次からは、すべてわざと言い間違えるんです。タマネギ、なら『タ・ネ・マ・ギ』とか。絵を描く時も、パイナップルの絵の横にわざわざ『パ・ナ・ッ・プ・ル・イ』と書く子までいて。でたらめ言葉を楽しむ活動になったような……。でも、僕の言い間違えが波紋を呼んで、活動が盛り上がったような気もするから、これは倉橋のいう『うっかり』ですか？』

実におもしろいエピソードです。K君はでたらめ言葉を気にしているようですが、本来の名前を正確に覚えているからこそ可能になるわけだし、「パナップルイ」と書いた子が本当にそのように記憶していくわけではないでしょう。活動を盛り上げるきっかけをつくったK君の言い間違いは、倉橋の文脈における「うっかり」の「教育的に大切なはたら

き」を感じさせます。

K君に「おもしろいエピソードをありがとう」とお礼を言って別れましたが、彼が研究室を出て行った途端、あることが気になってきました。彼の設定保育を見ていたクラス担任の先生はどのように感じたのだろうか。養成校の教員が「教育的に大切なはたらき」などといえるのは気楽さゆえのことであって、担任の立場からするとでたらめで楽しんでも……。ということになってしまいうものだろうか。そう考えると、何となく不安になってしまいました。

### 保育者のコメント

さらに翌日、K君にもう一度来てもらって聞きました。「昨日の話だけど、反省会で先生にどう言われた？」K君は、にやりとして話してくれました。「それがですね……。僕が言い間違いをして、でたらめ言葉が飛び交うようになった時、僕はかなり慌ててしまったのですが、ふと先生を見るとニコニコし



ていたんです。ちよつと不気味で、反省会で何を言われるかなあ、とドキドキしていました。反省会の時間がきて、先生がいつものように『今日はどうでしたか?』と聞いてきたので、『今日の設定保育はよかったのか悪かったのか、複雑な気分です』と答えました。そうしたらその先生、何て言ったと思います? 『あれでいいのよ。子どもたちすごく楽しんでたでしょ』と。緊張が一気にほぐれましたよ。

K君の話を聞いて、不安が解消されほつとしたのはいうまでもありませんが、私にとつて興味深かったのは、続きのコメントです。K君によれば、クラス担任の先生は次のように言ったそうです。

「K先生が言い間違えた時、どんな顔してたか覚えてる? 顔をゆがめて「やっちゃった」という表情だったよ。子どもたちはそこもおもしろかったのよ。私も笑っちゃった。K先生はうっかり言い間違えたことで指導案上の計画からそれてしまったのを後悔しているかもしれないけれど、そういうことはある



わよ。私、保育者になって二十年以上経つけれど、そういうことはしょっちゅう。しょっちゅうじゃないかもしれないんだけど……。でも、信じられない言い間違いみたいなのうっかりなんて、いつ起こるかわかんないしね。防ごうと思っても防げないなら、うっかりを防ごうとは意識せず、その時はその時って割り切つて、とにかく楽しんで保育していいよと思つてるの」。



実習生K君への語りからにじみ出る「うっかり」への思い。「その人のもち味」として、「教育的に大切なはたらき」として、「うっかり」について述べる倉橋の保育観と重なり合い、思わずK君にこう声をかけてしまいました。

「K君、いい先生に指導してもらったね。その先生、倉橋そのものだよ！」。

### 私に残された課題

「うっかり」による「教育的に大切なはたらき」なんて、狙うものではありません。狙った瞬間「うっかり」ではなくなります。「ねらい」「内容」という枠組みに基づく指導計画には決して表れませんが、そうした計画不可能性ゆえの「教育的に大切なはたらき」というものがあるのかもしれません。倉橋、K君、K君の指導者の保育者に導かれて幼児教育の魅力にまた一つ触れることができたと思います。しかし、私には大きな課題が残されています。この魅力

を理論的に説明することです。幼児教育における「うっかり」について、もうしばらく考え続けてみたいと思います。<sup>注3)</sup>

(高知学園短期大学講師)

### 注(参考文献)

- 1 杉原徹「本学幼児保育学科における実習指導の課題—学生のコメントを手がかりとして」『高知学園短期大学紀要』第40号 二〇一〇年 p.45・55
- 杉原徹・小島一久「保育者養成校と附属幼稚園との連携のあり方に関する研究—教育実習事前指導重点化のための試みを通して」同前 p.57・68
- 2 無藤隆「保育学研究の現状と展望」日本教育学会編『教育学研究』第70巻第3号 二〇〇三年 p.103・110
- 3 矢野智司「意味が躍動する生とは何か」世織書房 二〇〇六年



# 「うっかりしている時」とチャンスの訪れ

石塚美穂子

いずみナーサリーに勤務して二年目、私はまだまだ駆け出しの保育士ですが、新しいことに慣れることで精いっぱいだった一年目に比べ、少しだけゆとりをもって保育ができるようになってきました。以前勤務していた幼稚園での数年間と、新しくナーサリーに勤めてからの保育を振り返ってみると、カリキュラムを立て、意図をもって保育をしていく中で、なかなかそううまくはいかず、予想もしない展開になることがあり、保育はおもしろいと感ずることがありました。逆にとんでもない失敗をしてしまっ

……と落ち込むこともたびたびありました。

そんな私がここまで保育を続けてこられたのは、子どもたちや周囲の大人たちなど、たくさん支える力があつたからだと思います。そのことが私の心の支えとなり、日々の活力となっているのです。

「先生、大変!」

以前勤めていた幼稚園で、年長組の担任をしていた時のことです。男児Rが虫探しに夢中になっていました。私は、Rがどんな表情で戻ってくるか、楽



しみな気持ちで見守っていました。

しばらく経ち、「せんせい！ カマキリ見つけた！ バッタもいたよ。自分で捕まえたの、すごいでしょ！」と、それは満足した表情で見せにきてくれました。虫かごを大事に持ち、「飼いたいな」と言うR。

「一所懸命探したから大事に飼いたいのよね。お帰りの時に、みんなに相談してみましよう」と話すと、にっこり笑い、うれしそうに庭へ駆けていきました。

その後、「お帰りの時間よ」と園庭で遊んでいた子どもたちを呼びに行った時、Rが焦った様子で虫かごを持ってきました。

「先生、大変！ バッタが食べられちゃってる……」残酷なことに、ムシヤムシヤと食べる音も聞こえました。同じ虫かごに、この二匹がいたら、食べられてしまうことは予想がつきますが、私は当時、Rにどうかかわろうか、どんな言葉をかけようかとい

うことに一所懸命で、先のことまで考えが及ばず、このような事態を招いてしまいました。

Rが虫を見せにきてくれた時、私はほかの子どもとかかわっていて、そこから離れ、R一人に気持ちを向けることは難しいと思っていました。それでも喜ぶ気持ちには応えたいと、その場で言葉をかけ、私なりに精いっぱい心の心を伝えたりしました。しかし、忙しさにかまけて新しい虫かごを用意するのを忘れ、バッタの命を奪ってしまったので、後悔の気持ちが残りました。

クラスの子どもたちが、うわさを聞きつけて集まってきました。代わる代わる虫かごの中をのぞいています。

「あつ、カマキリが、バッタを食べてるよ」

「バッタが、かわいそう」

「カマキリは悪い奴だ」

など、感じたことを思い思いに口にする子どもたちですが、



「でもさ、カマキリもおなか空いてたんじゃない？  
カマキリだってごはんがなかったら、おなかペコペ  
コでかわいそうだよ」とR。

「あつ、そうか！」と周りの子どもたち。

カマキリとバッタ、両者の気持ちを考えるように  
なっていました。そして子どもたちで相談し、カマ  
キリは園庭に逃がすことに決まりました。

お帰りで集まった時、カマキリがバッタを食べた  
事実と重ねて、私たちは、ごはんを食べる時、魚や  
鶏、豚、牛など生きている命をいただいているとい  
うことを、ていねいに話しました。私は、このよう  
な話をできる機会がもてるとは思っていませんで  
したし、もちろん、この日の計画にもありませんで  
した。でも、いまこの時がチャンスだと確信し、話  
をしたのです。命のことを考えていくきっかけに  
なったのではないかと感じています。

私のうっかりから、子ども同士の会話やふれあい  
が生まれ、そこから保育が展開していきました。何

だか、子どもたちに助けられたように思います。そ  
して、思いもよらないところでチャンスは訪れてく  
るものだと驚くと同時に、新しい発見をした瞬間で  
もありません。

### 友達ってうれしいな

いずみナーサリーでは、〇・一・二歳児の子ども  
たちが生活をしています。緩やかにクラスが分かれ  
ていて、私は現在〇歳児クラスの担任をしています。

途中入所してきたS（一歳五か月・女兒）は、い  
までは、ナーサリーが安心できる場となり、担任と  
の信頼関係もでき、自分らしさを出し始めています。

最近、一歳児クラスのK（一歳六か月・女兒）に  
関心をもつようになったので、今後は、出合いの  
チャンスができるだけつくっていくこうと思いい、Kの  
いる保育室へ連れていき、ふれあうきっかけを待ち  
かまえていました。<sup>注</sup>

おままごとで遊びを共有できるかな、一緒に絵本



を見るかな、といろいろ期待をし、誘いかけますが、Kは、近づいて頭をなでてくれることはあっても、それ以上のことはありませんでした。また、Sもそれほど追うことがありませんでした。出会える機会を増やそうと意図をもっていました。この時は、互いに求めていなかったのではないかと思えます。

いずみナーサリーでは、その日のクラスの計画を伝え合うようにしています。一度決めても、その時の子どもの状況で変更するなど、柔軟に対応しながら保育をしています。

クラスごとの計画で大学構内へ散歩に行くことがありますが、学内にも幾つか遊ぶ場所があるので、それぞれのクラスが行く場所を事前に確認し合うことにしています。目的によっては、散歩に行く場所を同じにしたり、あえて違う場所に変更したり、とさまざまです。

天気の良い、ある日のことです。外で心地よく過

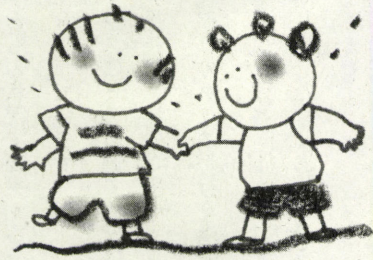
ごしたいという思いだけで、〇歳児クラスは大学構内の広場に散歩に行くことにしました。ほかのクラスの子どもたちが同じ場所に行くかどうかは考えずに、うっかり決めてしまったというような状況で出発しました。

到着すると、〇歳児クラスと一歳児クラスが同じ広場で出会いました。その時、Kが近づいてきて、Sの手を握ろうとしていたのです。「いまこそ、ふれあいたいと思っている時だ！」と感じました。

「仲良くしようって言っているみたいよ、うれしいね」と、私はSに言葉をかけました。Kの担任も、「Sちゃん、一緒に遊ぼう」と、Kの思いを言葉にしました。何だかSはうれしそうです。二人の手がしっかりつながれた時、Kは、心もちお姉さんらしい表情をし、Sは、はにかんだ笑顔を見せていました。

そして、SはKに手を引かれ、歩き始めました。二人の間には確実に幸せな時間が流れていて、心がつながったように感じられました。それぞれのク





ら、子ども同士が求めている瞬間があったのに、自分の思いが先走っていたために、見えていなかったのではないかと思いました。

クラス別々に出発し、散歩に行く中でも、到着してほかのクラスとの出会いがあります。○歳児の子どもたちも「あつ、会えた!」「みんながいる!」と言っているかのようにうれしそうな表情をしたり、指さしをしたりします。一、二歳児クラスの子どもたちも笑顔で手を振り、こちらに来てくれるの

ラス担任もその場面を見てほほ笑んでしまう、幸せな“とき”だったように思います。

私が意識して、SとKの出会いの場を用意していた時は、もしかした

です。そこから、ふれあいにつながっていくことがたくさんあることに気づきました。

保育室でも、異年齢のクラスと、いつでも緩やかに行き来ができます。このような重なり合う環境があることで、子どもも大人も、人との出会いを楽しみながら、ゆったりとした気持ちで過ごしていけるのではないのでしょうか。

偶然と必然、この両方が絡み合う中で、保育は行われています。そのどこかで確実に、子どもたちにも、人との出会いや、人と気持ちを通い合えるような、いろいろなチャンスが訪れているように思えます。

### 気づかせてもらうことのありがたさ

保育は、一方的ではなく、互いにふれあうことで成り立っています。保育者が子どもに働きかけ、子どもが保育者に応じ、子ども同士も気持ちを重ね合い、みんなが影響し合い、育っていきます。幼稚園



の事例は、まさしく、子どもたちのふれあいがあった、それに支えられてこそ、成り立った保育だと思っています。

ナーサリーの事例では、出会いのチャンスを用意したことは計画でした。しかし、保育をしていくと、実際の子どもの姿との間にズレが生じ、計画どおりには進みません。このことに気づき、計画に縛られずに、いまの子どもの姿を大事に保育をしていることが、子どもと保育者の安定した生活につながっていくのではないのでしょうか。

いろいろと考え、計画を立てても、保育はそのとおりにはいきませんが、カリキュラムを立て、見通しをもつことは必要です。計画どおりにいかない時に、いま、何が必要なかを考え、全力で対応していくことが求められると思います。この考える時こそ、私たちを成長させてくれる、絶好の学びのチャンスではないかと思うのです。

うっかりが、ただの不注意となってしまうことの

ないように、あの時、私は子どもの思いに気づいていただろうか、保育者としてのかかわりはどうだったのだろうか、振り返ることを大切にしたいと思っています。

倉橋先生の「うっかりしている時」の教えには、私はまだまだ到達していませんが、思いがけないチャンスの訪れがあり、そこから保育が発展し、新しい発見ができたことは、私にとって、大きな一歩だったと感じています。

子どもと向き合い、子どもに寄り添う保育を大切にし、その日、その場に訪れたチャンスをしっかりと受け止めることのできる保育者でありたいと思います。

(お茶の水女子大学いずみナーサリー)

注 SとKは月齢が近いのですが、入園した時期が異なること、保育室の数、広さの関係でクラスが別になりました。





保育

の

創意工夫

7

## 園庭の土山

前原 寛

梅雨が明けると強い日差しが照りつけ、夏本番を迎えます。子どもが泥んこになって遊び回る季節です。

私のかかわっている保育園は過疎地域にありますが、園庭はさほど広くありません。その園庭で運動会を実施していますが、見学に来られた方々が「ここで運動会をするのですか」と驚かれるほどの狭さです。

ですから、季節ごとに遊具の配置などを変化させ、狭い園庭を有効に活用する工夫をしています。運動会を行うために、九月から十月にかけて園庭は起伏のない状態になりますが、それ以外の時期は多少起伏があっても問題になりませんので、園庭に土山をつくります。その土山が存在感を最も発揮するのが夏



です。

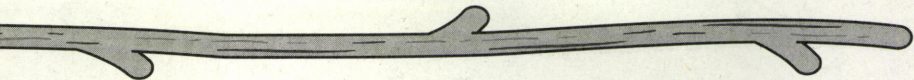
土山をつくるのは、子どもが遊びやすい土質の土が手に入った時になります。粘土質の土は硬くなる上に、表面がつるつるして滑りやすくなり、扱いにくいものです。かといって、すぐ崩れてしまうようでは、おもしろさが半減してしまいます。ある程度の硬さを保ちながらも子どもの扱いやすい土質でないと土山の特性は活かせません。そのような土を、だいたいトラック三台分ぐらい園庭に盛ります。

土山をどのように使って遊ぶかは、子どもに任せられます。駆け上ったり駆け下りたり、三輪車で勢いよく滑り降りたりしています。よちよち歩きを始めた小さな子どもたちにとっては、ちょっとした山登りになります。その土自体が、格好の土遊びも提供してくれます。土山での遊びに子どもは飽きることはありません。

そんな中で、おもしろいなと思ったことがありました。土山をつくったら、子どもたちが、頂上部分をせつせと崩し始めたのです。何日か経ったら、頂上が火口のような状態になりました。何となく桜島に似ています。子どもにとって身近に親んでいる山の形があるんだな、と思うことでした。

土山をつくる時期は決まっていますが、夏には必ずといっていいほど、園






庭にあります。暑い時期の土山は、最もいい遊び環境になりますから。

ただし、つくる場所が問題になります。園庭のどこでもいいというわけではありません。夏に木陰になる場所でない、土山での遊びは発展しません。

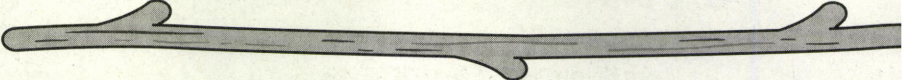
ある年の土山の位置は、例年よりずれてしまいました。つくった時は春でしたので、あまり気にも留めていませんでした。梅雨が明け夏本番を迎えると、待つてましたとばかりにガラガラした日差しが連日続きます。位置がずれた土山は日差しの中にあり、とても日中に遊べるような状態ではありませんでした。

夏場の直射日光の当たるところでの活動は、日射病や熱射病などの危険があります。日差しを避けるために、園庭には樹齢数十年になる木が何本か植えられています。桜やセンダンなどの落葉樹で、夏には濃い木陰をつくります。園庭の半分以上が覆われますので、子どもたちの戸外活動は、もっぱら木陰で行われています。

園舎は開放的なつくりになっており、クーラーは装備されていません。どんなに暑くても扇風機を動かすぐらいです。クーラーを使わないのには理由があります。クーラーが作動していると、部屋が閉め切られてしまいます。子どもも、冷えて快適な空間があれば、そこから出ようとしなくなり、室内に閉じこ







もりがちになります。その結果、子どもの戸外遊びが激減してしまいました。そのような事態を避けるねらいがあって、クーラーを使わないようにしているのです。

鹿兒島でクーラーが無いと暑いのでは、と思われるかもしれませんが。しかし、建物が開放的であり、園庭に樹木の木陰が広がっているので、真夏でもクーラーとは違う涼しさを感じられます。

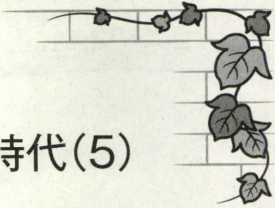

例年、土山は木陰につくるように配慮してはいたのですが、その年は日が差し込む所につくってしまったために、土山での遊びが活発化しませんでした。遊具であれば移動させることもできますが、さすがに土山は動かせません。環境構成としての土山のつくり方について反省することでした。

そんな年もありましたが、毎年夏の間は、土山を使った活発な遊びが展開されます。子どもの遊びがダイナミックになるにつれて、土山は崩されて小さくなっていきます。そして、九月の中旬にはすっかりならされて、運動会を待ち受ける状態になっていきます。

園庭の様相を変える土山の存在は、夏の子どもの遊びになくてはならないものなのです。

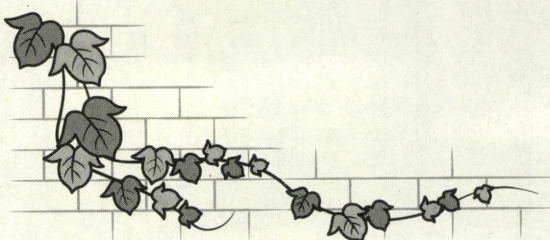
(鹿兒島国際大学准教授・元安良保育園園長)





幼稚園の源流を求める旅  
森有礼の第二次在米時代(5)

## アメリカでの新たな出会い



国吉 栄

### ワシントン着任まで

二〇〇六(平成18)年、ワシントンに到着した私は、ホテルに荷物を置き、周辺の地図をもらってM街に向かった。日本弁務使館があつた場所である。森有礼が館員たちと学生下宿のように住んだといわれる弁務使館。

現在の、すべてが整つたところに赴任するのはまったく違う、何もないところから始まる外交官の生活。

森と同時期に鯨島尚信が欧州に派遣されていた。米欧で日本の外交を拓いた二人が、共にハリスに忠誠を誓つて帰国した人物であつたことは興味深い。鯨島は派遣先が歴史と伝統を誇るヨーロッパであつたため、新米外交官として森以上に苦労した。その彼を顧問として助けたのは、薩摩藩留學生をハリスに誘引した英国貴族オリファントの友人であつた。森の場合はどうだつたのだろうか。誰か援助者はいたのだろうか。

それにしても森の外交官時代の人脈には目を見張るものがある。まだ造営中だつた新興人工都市ワシントンを



本拠地に、どのようにあれほどの人脈をつくったのか。いや、人脈などという即物的な語はふさわしくない、心からの協力者をつくったのか。

日本弁務使館があつた場所には、コーヒーのチェーン店、スターバックスが入つていた。M街に面したカウンターに座つてコーヒーを飲み、ぼんやり通りを眺めながら、彼のここまでの道のりを思い浮かべた。

私がどうしても気になつていたのは、彼がワシントン着任までの旅程を、大陸横断の途中、突然変更したことであつた。当時エリー湖畔のプロクトンにあつたハリスのコロニーには、英国から渡つた六人の学生のうち最年少の少年が暮らしており、森赴任前後数か月の彼の日記が残されている。それによれば、森はアメリカ派遣が決まるとすぐに、コロニーに知らせた。そしてサンフランシスコ到着後、同地在住の日本領事を通してその返事を受け取つている。今日の外交のあり方からすれば奇妙なことであるが、サンフランシスコにはブルックスというアメリカ人の日本領事がいた。彼は幕末からの親日家で、

いまだ駐在外交官を置いていなかった日本政府が領事として委嘱していた人物である。

プロクトンからの手紙を受け取つた森は、日本人十四人でそちらに向かうと返信した。十四人とは、森と属官三人のほかは、森自身が連れていった、あるいは同行を依頼された者たちで、身分や立場は異なるものの、大きく括れば米国で学ぶことを志す留学生たちであつた。ハリスはコロニー内に日本人のための学校を開く準備に取り掛かる。ところが、手紙がコロニーに届いた直後に追いかけるように森からの電報が届いた。二週間はそちらに行けなくなつた、と知らせる電報である。

森はなぜ予定を変更したのか。東海岸に出る前に留学生を引き連れてプロクトンに行くというのは、旅のルートとしては自然であるが、外交官として赴任する途上の行動としては異様である。予定の変更は当然であろう。しかしこれまでの私のささやかな森研究から考えて、私には、彼が自分自身でそうしようと決めていた重要な予定を、さしたる理由もなく変更するとはどうしても思え



なかつた。森は電報を打つてからきつかり二週間後にプロクトンを訪れているから、充分な考慮の末の変更であつたことは確かである。森の第二次在米時代のまさに始まりの時である。ハリスとの関係を考える上でも、以後の外交官としての活動を考える上でも、この予定変更には重要な意味があると思えてならなかつた。

### キンズレー文書の発見

長い間考えあぐねていた私であつたが、先年、私は森研究の新たな資料群を見いだした。日本領事ブルークスの友人であり奴隷解放論者であつた、ボストンの実業家キンズレー関連文書である。それによつて私は、森が急きよ予定を変更した理由を知つた。

森は西海岸から同行したブルークスに、大陸横断の車中、日本における信教の自由の実現と国民の教育にかけ強い思いを語つたのである。ブルークスは森に心酔した。ボストンに行きましょう。友人を紹介します。彼はあなたに心から協力してくれるでしょう……。

二人はニューヨークを経由してワシントンに行き、國務長官フィッシュに信任状を提出。大統領グラントに謁見し、大統領主催歓迎会に臨んだ後、ボストンに向かつた。森の話に心を打たれたキンズレーは、その翌日の昼にボストンの紳士の会を招集した。ロングフェローら二十人近くの名士が出席し、全面的に森に協力を約束した。キンズレーは森の求めに応じて、これから渡米してくる日本人をボストンの公立学校に入学させることを約束し、ボストンの上流家庭に日本人学生を家族の一員のように迎えるよう働きかけ、奴隷解放の論客チャールズ・サムナーほかワシントンの多くの有力者たちに森の目的に協力するよう手紙を書いて森に持たせた。

会合を終えたブルークスと森は、その日の夕刻ワシントンへと戻つていった。ワシントンで諸用務を済ませたのち、森は属官一人と留学生一人を伴つてプロクトンを訪問した。プロクトンに四泊し、留学生をハリスに託すと、森はその足で再びボストンに向かつた。

森は米国上陸早々、願つてもない協力者を得たのである



る。ここに彼の比類ない活動の端緒が開かれた。それは取りも直さず、彼がハリスから得た芯なるものに裏付けられた明確な目的をもっていたからにはかならない。そして、その強さと情熱がもたらした新たな出会いが、逆に、森の第二次在米時代におけるハリスの影響を相対的に減じさせることになったのである。大陸横断途上の予定変更は、森にとつても、わが国にとつても、重要な転機であった。終生ハリスの忠実な徒であったとされる盟友鮫島との違いを挙げるとするならば、森がアメリカ到着直後にこの新たな出会いを得たことであろう。思いがけない重要な資料の発見であった。<sup>注</sup>

プロクトンを辞して再びボストンに向かった森が最初にしたことは、のちに同志社を創設する新島襄との面会であった。面会場の場を整えたのもキンズレーであった。

幕末に密出国した新島は、当時ボストン近郊のアンダーヴァー神学校で日本への宣教師となるべく学んでいた。森は後日、外務省に新島の国外脱出の罪を許し、海外留学免状を渡されたい旨を申し立て、新島に日本に米

国式の学校をつくり監督にならないかと誘った。


着任から四か月後、森は本国政府に対して、着任後初めての上申書を提出する。国立公文書館に「少弁務使森有札耶蘇宗二付意見書」と題して所蔵されている文書である。森自身は「宗旨一条伺」と記して筆を起こしている。「現今の国内の衰頹すいたいは政治に宗門をかかわらせているためである。ゆえに政府は何宗にもかかわらないことを全良とすべし……」「知識を広くし道理を明らかにすれば宗旨のことで迷い患うことがないのであるから、学校を起こすことが最大の急務である……」彼は、天皇を中心とする祭政一致の政府に対し、政教分離の必要と教育の重要性を強く説いたのである。

日本における信教の自由の実現と国民の教育の創出。これがまさに森がブルークスに、そしてキンズレーに語った彼の渡米の目的であった。

(彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師)

注 本連載は新出資料が多いため個々に対応する紙幅の余裕がない。資料の扱いについては最終回で一括して述べたい。





# 園のくらしを育む 4

## 幼児とアート(2) — ものとアート —

秋田喜代美

### 1 紙テープの世界

保育園や幼稚園を訪問させていただくと、自然に心が弾んでくるのを感じます。それは、子どもたちのみずみずしい遊びやくらしの柔らかさに、喜びや驚きを感じるからです。そして、そこから知的な発見やひらめきがその場で生まれてくるからです。それらの中には、知識を膨らませてくれる経験と、これまでにはなかった見方を与えてくれる経験があります。後者の一つに、言葉の意味を改めてわかっていくことがあるように思います。


昨年九月、東京大学全学対象保育園の研修の関係で、アメリカのハーバード大学附属の六つの保育園を視察訪問しました。その時に出会った園での実践とその記録が、これ



までの私には充分になかった見方を与えてくれました。ピーボディ・テラス (Peabody Terrace) という保育園は、乳児が描いたなぐり描きやフィンガーペイントがていねいに額縁に入れて飾られていて、ドキュメンテーションの宝庫でした。子どもたちへの保育者の真摯なまなざしが映し出されることで、保育の空間が子どもと保育者の二重のアート空間になると感じました。そして、子どもたちの記録を長期間ていねいにとり、それを振り返って実践のレポートなどを書いておられました。保育者が書いた一つひとつのレポートが、保育学や教育学の古典的文献に関する教養に支えられ関連付けて深く考えて記されていたので、私は帰国後に何度もそのレポートを読み返しました。このような経験は、日本の保育者の実践記録では感じたことがないものでした。

その一つに、紙テープの実践記録があります。五歳の男の子が色鉛筆で長い線をずつと引つ張って描いていました。と、彼は周りを見渡して、棚にあった巻いてある黄色の紙テープを見つめます。そして、画用紙の上に線を引くのではなく、その紙テープを長く延ばしていきます。すると周りの友達もすぐにこの子の考えに気づき、端を持ってあげます。どんどん延ばしていくと廊下の端から端まで届きました。またほかの子が別の色の紙テープを持ち出し始めます。子どもたちが紙テープを使ってよいか保育者に了解を求めた時に、一度にこんなに使ってよいのかという思いが保育者の頭を一瞬よぎります。けれども、使用を肯定的に認めています。そこからさまざまな遊びが始まります。いろいろな色の紙テープを延ばしていくと、どれぐらいあるのだろうと長さを考える子

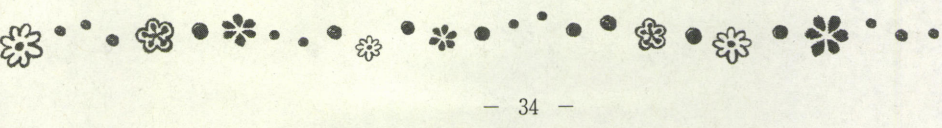




どもが出てきます。それらの紙テープを一緒に集めようということから、紙テープがころんがらがり丸まっています。それを子どもたちは「テープボール」と呼び始めます。そのテープボールから、ファンタジーが始まり、ごっこ遊びへと展開していきます。さらに、園のほかの年齢へもさまざまに活動が広がっていくことで、物語は続きます。実践記録ではなく、英語を日本語にした上にかいつまんでご紹介しているので、生き生き感が伝わらないかもしれないのが私としては残念なところ です。

## 2 人工物・ツール・サイン

紙テープは、本来、人がある必要性から考え出したものです。この意味で人工物（アーティファクト）です。飾る、縁取るなど、さまざまな意味をもって形成されたものです。それを子どもは廊下の長さを測る道具としても使います。これは紙テープの本来的な意味ではありませんが、子どもが考え出したツール（道具）だということが出来ます。そして子どもたちはそこから、テープボールというものを偶然にして作り出し、新たな意味を子どもたち自身でつくり、そこからファンタジーの世界で遊びます。このテープボールは、遊びの世界で意味をもつサイン（兆表）として機能します。このように子どもは、先達の使い方を学んでいくと同時に、それを新たな道具として使ったり、またそれまでの見方や機能を離れたりすることで、自分自身の新たなサイン、自らある固有の意味世界をつくり出すことができます。そしてそれを仲間と共有し広げていくこともし





ています。これこそがアートであり、遊びの醍醐味になっていくだろうと思われま  
す。同じ一つのものでその意味や質をどのように変えていくのかを、この保育者は見  
つめて大事に記録にとり、そしてものにかかわる理論をもとにして論じていました。実践の中  
にはいろいろなものが記録されます。決められたことを決められたとおりに使うの  
はなく、それがどのように一人の子どもの中で意味を膨らませていくのか、意味の世界が  
膨らむことで子どもたちの経験の質が深まる過程を描いていつています。

先日、東大本郷けやき保育園で二歳児が仲間と絵を描いているところを撮影したビ  
デオをカンファレンスで見ました。赤でリングを描いてから中を黄色に塗り、黄色いリ  
ングと言っています。皮だけが赤いことをこの子はわかって、丸いリングの中を黄色に  
しています。その丸を見ながら「リングシャキシャキ」と言って食べるまねをし、ぐる  
ぐる線を描くうちにリングは線路になってゆき、「シュツシュツ」と声を出して描いて  
きます。と、その子はその画用紙を立ててその後ろにクレヨンの箱を置き、「ガタン  
ゴン、ガタンゴトン」と言いながら身体表現を交えて机の上で画用紙列車を動かし始  
めました。こうした姿はこの年齢にはよくあることですが、描く道具としての画用紙がサ  
インとしての列車に変化していく瞬間でした。ものの量がたくさんあることが豊かな  
のではなく、ものへのかかわりの質の変化を経験していくことが豊かな経験となり、子  
どものアートを生み出すのではないのでしょうか。

(東京大学大学院教授)



## 脱皮と追い風

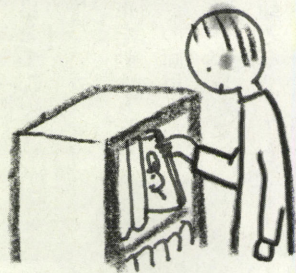
### ●自分の中から自分が生まれる

お金の好きな王様と、ドレスの好きなお妃に、念願の男の子が生まれてみると、ロバでした。王子は人間の服を着せられて教育を受けましたが、いつも独りぼっちでした。ロバのひづめで苦勞してリユートを習い、両親のために歌をつくって捧げると、「大変よいが、私は忙しい」と追い払われます。王子は人間の服を脱ぎ捨て、ロバの姿で旅に出ました。

### 松井るり子

長いさすらいの間に、美しい自然の音を自在に奏でられるようになった王子が、たどり着いた城でリユートを弾くと、その城に住む王と王女の心は「緑の丘を越えて、はるか遠い世界の果てへと続く道」へと運ばれます。ロバの王子の歌に、王女はうっとりしたり、笑いころげたりしました。

しばらくして、王女の花婿候補の王子たちの来訪があると聞き、ロバの王子は城を去ることにします。別れの歌に泣きだした王女を「僕がいなくなっ





ても、歌は思い出せる」と慰めると、王女は「歌よりもあなたが好き」と言つて、地団駄じだんだを踏みました。するとロバの皮が脱げて、りりしい王子が立っていました。王女は「そんなことなら、初めから知っていた」と言いました。

バーバラ・クーニーの描くグリム童話『ロバのおうじ』（ほるぷ出版）には、このように描かれます。二人は結婚して、六人の子どもに恵まれました。

子どもに手がかからなくなつても、お金は遠慮なくどつさりかかるし、それが終わつても、彼らにまつわる思い煩いは、消えてはくれません。それどころか、問題は複雑に、深刻さは増すばかりです。彼らの訴えは、親にとつては理不尽ですが、その意味を翻訳してやれば、結局のところ「古い服は自分にはもう合わない。脱がなきゃやつてられない」と、言っている気がします。

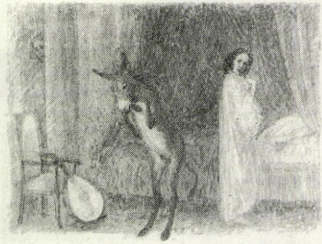
この王子様の場合、親に着せられていた立派な服は、ロバの姿を隠すためのものでした。親を見限つた後は服を脱いで、ロバに戻つて家を出ました。その姿のままに好きな人に受け入れられた時、ロバの皮が脱げて人間になり、結婚しました。最初の脱皮は、親と親にまつわるごまかしを脱ぎ捨てる形でなされ、二度目の脱皮は、自分と自分の出生にまつわる因縁を脱ぎ捨てる形でなされました。どちらも、痛かつたと思います。王子は、よくやりました。

子どもが、着慣れた皮の中に隠された、次のステージの自分を誕生させようとする時、まずは内から爪穴を開けて、引き破ります。それから、皮をはがすように手荒に脱ぎ捨て、さらには古い皮を焼き捨てなければなりません。

そんな手続きを子どもたちが進めてゆく時、親の目には、これまでせっかく与えてやつたよい物を、ずいぶん乱暴に破壊する反抗的態度と映つて、大変



シーン①



シーン②



シーン③



シーン④



『グリム童話集』(西村書店)  
p.30-31 から引用

腹が立ちます。怒るのも大人げないので、夫と二人して「いま、この子は『はんこ置き(反抗期。護身のオヤジギャグ)』だからね」「仕方ないね」「まだまだだなぁ」と、さもわかったような顔をして、本人の前でうなずき合ってやるのでした。

### ●王は無用の皮を焼く

リディア・ポストマ絵『グリム童話集』(ウイールヘルム・菊江訳、西村書店)の「ロバの王子」は、

魅力的な大人の絵本です。この絵本の中では、グリムの語り口に忠実に、王女はロバの姿のままの王子を、夫にします。婚礼の夜に父王は「ロバの王子がいつものように礼儀正しくふるまうか、心配」になり、けらいに寝室を探らせます。

四つのシーンに分けて、モノクロで描かれる夜は、こんな感じです(右の挿絵参照)。

①ロバがリュートを置く。ベッド脇に立つ姫が、白いドレスを脱ぎようとしている。



②王子がロバの皮を頭から脱ぎにかかる。姫はシーツの間に裸で横たわって、半身を起こし、背中越しに振り返る。

③大変美形の人間の若い王子様が、腰から上の裸体を現す。

④けらいが、ベッド脇の床に落ちたロバの皮を気にしながら、寝室からコソコソと出てゆく。

二人が寝静まった後、王様はこっそり寝室に忍び込み、娘の夫が人間の若者であることを確認すると、ロバの皮を拾ってきて、火の中に投げ込みました。何と大胆な父親でしょう。娘夫婦の寝室を探らせ、自分でも乗り込み、ものを取ってきて焼いてしま



まうとは。常識から外れるこんな行為が、すべて「表面に出る」親が、いるんですね。子どもが寝ているかもしれないと思って、

ノックを遠慮して携帯電話に「ごはんできた」とメールしてやるような配慮さえ裏目に出してしまう私は、確信に満ちたこの父親が、うらやましいです。この王様はきつと相当の権力者で、その権力を正当に行使してきた人なのでしょう。

②の絵を見ていたら、目をつむったロバの胸辺りの皮の破れ目から、ふんばり顔で王子が出てくるどころが、まさに出産だと思いました。脱ぎ捨てた「おふくろ」を再び着用しないように焼き捨てるのが、王の役目と読めるかもしれません。成長したいという願いに突き動かされている子どもにとって、昨日までずつとやってきたロバとしての振る舞いを明日も続けるほうが楽なのに決まっています。だからこそ、焼き捨てるほど過激な、ロバの皮との決別が必要だったのでしよう。

息子にとって「おふくろ不要」の時期がきたことを、少ししじめに考えてみることにします。



## ●「拒否」から「むんずとつかむ」まで

結婚を申し込むために、はるばる旅してきた殿方たちを、はねつけるだけでは飽き足らず、「この私」に求婚してきた身の程知らずの罰として、殺さねば満足しない姫が、お話の中にはたくさんおいでです。相手の身分が高いという客観など、説得力になりません。この私の主観にイエスと言わせてごらん、というわけです。大勢の男たちが、自分のせいで死んでゆくことの残酷に、気づこうとしません。

出久根育が絵を描いたグリム童話、『あめふらし』（パロル舎）の、絵の中にコロロンと転がる不思議な数字、これは何？ と考えてみれば、おおそうだ、串刺しにされた男たちの首の数。お話の世界って、グロテスクなのよねーと思いを巡らせば、いやいや現実世界もグロでは負けておらんわ、と気がつくのでした。

姫は世界じゅうを見渡す12の窓のついた塔もつていたので、隠れた男を必ず見つけられると自信满满。求婚勝負のかくれんぼに挑んで負けた男たちの首をはねては、串刺しにして99個も並べていました。100番目の挑戦者の見目麗しい若者は、アメフラシに変身して姫の髪の中に隠れていたので、どの窓からも見つかりませんでした。

ナメクジに似たアメフラシが、髪に潜んでいたとわかった時の、ギョッとする感じと悔しさと怒りは、容易に想像できます。姫はアメフラシをつかんで床に投げつけました。こっそり人の姿に戻って王女と結婚した若者は、自分の隠れ場所を決して打ち明けなかったので、王女は夫が自分より優れていると思つて尊敬しました。

気味の悪いアメフラシを、なにも自分の手で「むぎゅう」とつかまなくても、髪をほどいて、腰元に振り払わせれば触らずに済むのに、よほど怒つてい



たのでしよう。殺してでも男を寄せ付けない潔癖症の姫を妻にしたこの若者の勝因は、冷静ならば決して触れない、ぬるべたつとした生き物を、姫本人の素手でつかむよう、仕向けたところだと思います。

その時の生々しい感じを、読み手に想像させることで、さらに考え過ぎな方向への想像力をもたくましくさせてくれます。この若者は、99人の男を殺した姫など、ほんとに欲しいのでしょうか？ 欲しいのでしょうか。 「失敗者リスト」が長いほど、成功者の達成感と勝利感は大きいのでしよう。王子たちの権力欲をあおり立てる魔性の姫ごみ、恐るべしです。

自分の子が「魔性」にフラフラッとなりかけている時、あなたが99の死体の一つになるのは明らかだから、やめときなと言ってやりたくありませんが、言って聞くわけありませんよね。最初の成功者になれる可能性に、望みをかけると決めて「われこそ

は」とのぼせている者に、親の阻止など追い風です。親ってほんとに、出番がないのだと思います。

恋ではなくて、大学入試なんですが、まあ、あれも恋みたいなものかもしれません。だめだった時に悲しいし、インターネットでほぼ同時刻にわかるんだから、合格発表なんか見に行くなど止めたのです。が、うちのおつちよこちよいが、どうしても行くと言って聞きませんでした。県境を二つ越えて見に行って、だめでした。「ほらー」と勝ち誇る気には当然ならず、平凡な慰めの言葉も浮かばず、ただひたすらかわいそうでした。せめて「発表を見に行くな」などという追い風を、吹かさなければよかったです。と思った時は遅かったです。

要するに私は何の役にも立たなかつたわけですが、いつかはわが子も本当に必要なものを、むんずと自分の手でつかむまで成長してくれることと、期待しています。

(文筆業)



# 『豊田芙雄と草創期の幼稚園教育』の出版まで

—— すべては幸運な出会いから ——

前村 晃

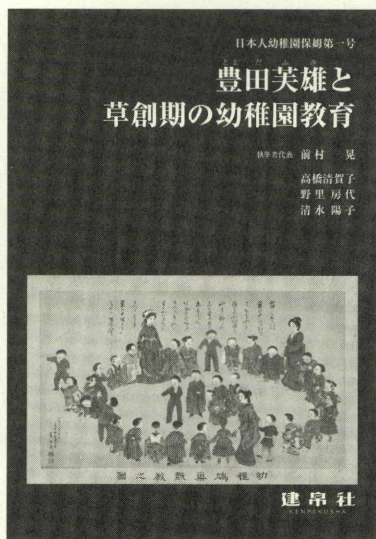
## 「豊田芙雄」との出会い

二〇一〇（平成22）年春、高橋清賀子、野里房代、清水陽子の三先生と私（執筆者代表）は、建帛社より『豊田芙雄と草創期の幼稚園教育』を出版いたしました。それなりに苦勞はしましたが、幸運な出会いが幾つか重なって、出版できたように思います。

豊田芙雄は、東京女子師範学校（現お茶の水女子

大学）の創設時に読書教員として抜擢され、翌年、同校附属幼稚園が開設されると、同園の教育にも携わることになります。同園で豊田芙雄と近藤濱は日本人初の幼稚園保姆（教諭）となったのです。しかし、当時、幼稚園教育については、桑田親五訳の『幼稚園（をさなごのその）』の巻上、巻中や、わずかな資料しかなく、豊田らは保育の具体的な方法はほとんど知らないまま幼稚園教育を開始しています。





ただ、幸い同園では、フレibel主義保育を学んだという、ドイツ人松野クララが主席保姆をしていましたので、豊田らは、クララが英語で講義し、それを監事（園長）の関信三が通訳するという形で、幼稚園教育の「伝習」を受けることができました。私が「豊田英雄」と出会ったのは、いまから二十数年前、早稲田大学に編入した直後です。私は、「教育の基礎である幼児教育」の歴史から調べ始め

ましたが、わが国の保育の開拓者は豊田英雄とその周辺の人々であることを知り、豊田らとフレibel主義保育の導入期の関係を調べることにしました。

また、西南戦争直後、豊田が、文部省から長期出張を命ぜられて、私の郷里である鹿児島にわが国二番目の幼稚園を開設したことも、豊田に対する個人的な関心を高めることになりました。

豊田英雄の前半生は波乱に満ちています。豊田の生まれた幕末の水戸藩は対立、抗争の絶えなかった所ですが、豊田の夫、勤王開国派の小太郎は京都で同藩の者に暗殺されているのです。豊田が偉いのは、志半ばで亡くなった夫の遺志を継ごうと決心をし、学問研鑽を積み、東京女子師範学校の教師として抜擢される因をつくったということです。

こうした悲劇に耐え抜いた豊田が、幼い命を育むフレibelの保育をどう受容し定着させていったのかを知りたくて、私は大学の卒業論文のテーマを



「豊田美雄とフレーベル主義保育」としたのです。

私の卒業論文は、主査の大槻健先生はじめ諸先生方から過分にほめられ、「小野梓賞（小野梓は早稲田大学創立者の一人）に推薦する予定だったが君の卒業が未確定だったので取りやめた」と言われました。しかし、優秀論文として一九八八（昭和63）年三月の早稲田大学哲学会誌『フィロソフィア』に概要を載せてもらいました。

## 研究の足踏み

豊田美雄に関する研究はその後も継続し、水戸、京都、田原坂（豊田の実兄、桑原力太郎陸軍少佐は西南戦争で戦死しています）、鹿児島など関係の土地を繰り返し訪ねました。豊田美雄の二回目の墓参りをした折には、当時、小学校低学年で、現在は私立大学でドイツ語の非常勤講師をしている娘に「パパはどうしてお墓ばかり見て歩くの」と聞かれて苦

笑したこともありました。

その後、資料等も増えていったのですが、私の豊田美雄研究には決定打が欠けていました。早くからこの研究の鍵は豊田の講義ノート「代紳録」にあると思つて、水戸方面でこれを探し続けましたが、見いだすことができなかったのです。

## 最高の出会い

私は二〇〇六年四月から二〇〇八年三月まで、佐賀大学文化教育学部附属小学校の校長を併任しました。その縁で、当時、鹿児島大学附属幼稚園の園長をしておられた西種子田弘芳先生と出会う機会がありました。先生から「先日、豊田美雄の子孫の高橋清賀子さんが園に見えましたが、当時の資料が相当残っているようでしたよ」という、私にとっては願ってもない夢のような情報もたらされたのです。もちろん、高橋先生にはすぐに連絡を取りました。



高橋先生が豊田のひ孫であり保育史研究者であることは以前から知っていましたが、うかつにも私は豊田の資料がそっくり高橋家に残っていることはまったく知らなかったのです。二〇〇七年春、私は高橋家を訪問し、最初に「代紳録」を見せてもらいました。長年探し続けてきた「幻」の「代紳録」を手にした時、私は思わず身震いしました。また、千点に近い豊田英雄関係の文書は茨城県歴史館の手で整理されたばかりで、利用しやすい状態になっていたことも幸いでした。大切に保存されてきた「高橋清賀子文書」は、まさに「宝の山」でした。

### 保育の原点を見る

明治初期の豊田らの保育理解は、実はびっくりするほど現代的です。子どもの成長を植物の成長になぞらえ、子どもの個性と発達に応じた保育を唱えています。また、行為（遊び）による保育を基本と

し、集団内の相互作用を重視しています。さらに、五感による学びを大切にし、想像力を豊かにし、創造性を引き出す保育を目指しているのです。

保育系学生、幼稚園、保育所の先生方には、まずは『豊田英雄と草創期の幼稚園教育』第七章の「手記『保育の芽』<sup>しおが</sup>」をめぐる謎と現代保育との繋がりあたりから、豊田英雄のいう保育のあり方や保育者のあるべき姿などを学び取っていただき、徐々に豊田の保育観全体に目を通していただければと願っています。豊田は『保育の芽』の中で「保育者といものは毎日、自分の心を温和にして、爽快で生き生きとするようにし、なおかつ親切で情け深く、物事に対しては注意が行き届いていて、そして忍耐強くなければなりません。」と語っています。豊田英雄の言動は現代の保育者にも大きな希望と勇気を与えてくれるものと信じています。

（佐賀大学教授）



## 居場所になるといついつと

伊集院理子

子どもたちは、家庭から一歩を踏み出して、同年齢の友達との集団生活を幼稚園・保育所で初めて体験します。昨年度、久々に三歳児の子どもたちの担任となり、心を新たに、子どもたちが「はじめの一步」を踏み出す過程にじっくりつき合っていました。

新学期の子どもたちは、母親が帰ろうとすると大慌てで泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって動こうとしなかったり、不安な気持ちを全身で表していました。初めて過ごす幼稚園は、子ども

たちにあって、とうてい自分の場所とは思えない所でありました。園での生活を重ねる中で、園の環境が、しだいに子どもたちの場所が変わっていきました。どのような生活を積み重ねて、子どもたちが園の環境を自分の居場所として受け止めていくようになったのか、一学期間の子どもたちとの生活を振り返ってみようと思います。

入園してから二週間が経ち、朝の受け入れがだいぶ落ち着いてきたころ、庭に出ていこうとする子ども



もたちも増えていきました。そこで思い切つて、周りにいる子どもたちを誘つて園庭の高台のほうまで出かけていくことにしました。私どもの園庭は、起伏があり、高台の部分を通称「おやま」と呼んでいます。三歳の子どもたちにとつて、「おやま」に出かけることは大変な遠出です。自分の背丈の四分の一ほどの階段を上るには、すべての力を集中させて、一步一步進んでいかなければなりません。うつそうとした樹木の中を通ることも、「おやま」までの道のりをさらに遠いものにしていたに違いありません。何段もの階段を上り終えると、ぱつと視界が開けます。明るい光に満ちた雑草園が目飛び込んできます。子どもたちは思わず走りだしました。そして、円を描くように雑草園を回りだしました。走っているうちに、子どもたちの力が、外へ外へと発散されて、それを補うように子どもたちの体の中から新しい力が生まれ出ているように思えました。

この日からほとんど毎日、子どもたちと「おや

ま」に出かけることを重ねていきました。

まだ自分一人では心もとなく、私の両手を求めて子どもたちが群がっている状況の中でも、「おやま」に出かける時は、脇に挟み込むようにして、ござを持つていきました。教師と手をつないでも、まだ不安でいっぱいな子どもたちは、毎日出かける前に、大好きなぬいぐるみを手に持ったり、おんぶしたり、手提げかばんにお気に入りのものを詰めたりして、自分を守つてくれるありとあらゆるものを身を守るための遠出となりました。

「おやま」に着くと、子どもたちは、それまで身を守つてくれた数々のものを次々と私に渡して、駆けだすのです。私は、ござを敷いて、子どもたちから預かったものを置いて、子どもたちと一緒に動くようにしていました。「おやま」には、雑草園だけではなく、さらに高くそびえ立つログハウスや築山があります。雑草園を走り回つて元気が出てきた子どもたちは、ログハウス登りに向かいました。一段



一段おっかなびつくり登っていく子どもたちの後に、ついて私も登りました。ログハウスの上は狭い場所ので、そこに座ると、必然的にそばにいる友達、教師の存在を身近に感じる機会になりました。ログハウスから見下ろすと、「おやま」が一望できました。「おやま」で遊んでいる年長児、年中児の様子もよく見えて、私が「ヤッホー」と声をかけると、子どもたちもまねをして「ヤッホー」と声を出しました。大きな声を出すことも、子どもたちの体の中から力を引き出してくれました。

園という新しい環境の中で、教師や友達と一緒に階段を上ったり、雑草園を走り回ったりして、体の中に力をため込んだり出したりしていくことで、入園当初の不安な気持ちもしだいに外に押し出されていったように思えました。

「おやま通い」も回を重ね、ログハウス登りの足取りもしつかりしてきたので、ログハウスから少し離れた場所にごさを敷き、私はごさに座って、子ども

たちの様子を見守ることにしました。すると、子どもたちは走り回ったり、ログハウスに登ったり、ほかのアスレチックに挑戦したりして、それぞれ思い思いに動き回っては、ごさに座っている私の所に戻ってきて、また出かけていくようになりました。

これまでの三歳の子もたちとの生活経験から、広い園庭の中でごさが子どもたちのよりどころとなることはわかかっていて、だからこそ毎回ごさを「おやま」まで運んでいたのです。そのよりどころになる場所に、私が腰を据えてみたら、子どもたち一人ひとりの動きがよく見えて、循環する動きがそれぞれに生まれていることが感じられました。その時、基点（循環する動きの基となる場所）をはっきりさせて、そこに私がしつかり位置付くことが、子どもたちそれぞれの動きをより引き出しやすくしていくことに気づきました。

五月中旬、初めてのお弁当の日のことでした。お



弁当の後の食休みに本を数冊読んでいると、「おやまに行こう」という声上がり、何人もの子どもたちがそそくさと靴を履き替え、「おやま」に向かおうとしていました。「早く、行こう」と子どもたちにせかされながらも、私は準備がまだできない子どもの手助けをしていたので、すぐには動きだせない状況でした。子どもたちは、なかなか動きださない私にしびれを切らして、何人かで「おやま」への階段を駆け上っていきました。「おやま」に続く階段道は幾つもあり、それまでの「おやま通い」の経験から、自分の保育室前に戻る一番の近道を子どもたちはわかっていて、その近道を通って次々に走り下りてきました。こちらもちょうど出かける準備が整い、子どもたちと一緒に走っていきこうとしたところ、一人の子どもが階段のたもとにある橋の所で、ダンゴムシを見つけて、その場で立ち止まりました。私もそれにつき合ってそこにとどまることになりました。先に走っていった子どもたちがまた近道を走り下り

てきたので、私は橋の所で子どもたちを出迎え、走ってきた子どもに次々ハイ・タッチをすると、子どもたちはまた駆け上っていきました。図らずも、私がとどまったことで、私のいる所が基点になって、子どもたちの循環する動きが生まれました。何回も走り回るうちに、子どもたちはどんどん元気になっていきました。

私自身、体を動かすことが大好きで、とにかく子どもたちと走る、登る、跳ぶ、踊る、何でも一緒に楽しむことをモットーにこれまで保育にあたってきました。久しぶりに三歳児との生活にどっぷり浸かってみて、一緒に動き回るばかりではなく、自分が基点になることで生まれる子どもたちの循環する動きに気づかされることがたびたびありました。





そんな体験が重なっていた時、津守真先生と津守房江先生の対談を本にした『出会いの保育学』の中の次の一文が私の目と心をとらえました。

(津守房江) ……私は、移動することによってぐるっと回ってまた戻って来る循環性が大事なのだと思います。外に行ってもまた元に戻って来るという存在のものが根底にあつての能動性だと思います。愛されて受け止められるだけではなくて、移動によって自分の場所があることを自分から把握することによって存在感がさらに確認できるのではないかと。

私は自分で勝手に、子どもたちの「存在感」というのは、落ち着ける場所があつてそこで安定して過ごす、じっくり過ごすなど、一か所にとどまることで導き出されるものだと思います。子どもたちの姿とこの一文から、「存在感」とは、とどまることだけではなく、移動して元の場所にも

戻っていく、その動きを自分からつくり出していくことを通して確かなものになっていくのだということに気づかされました。子どもたちは、新しく出合った環境に身を置きながら、自分から動きを起こして出かけていって戻ってくる動きを重ねることで、変わらなく存在している自分を確認していたのだと思います。

鬼ごっこのようにして追いかけると、三歳の子どもたちはよく、保育室の斜め前にある桜の老木の周りをぐるぐる逃げ回ったりしていました。さらに、元気が出てくると、園庭中央の花壇の所まで逃げていき、今度は花壇の周りをぐるぐる逃げ回っています。循環ということを意識に置いて、子どもたちの行動を見つめてみると、本当にいろいろな所で循環する動きをしていることに気づかされます。つい回りたくなくなるような変化のある園庭が子どもたちの循環する動きを引き出しているのだと考えます。

よくよく考えてみると、一学期の間、毎日のよう



に繰り返していた「おやま通い」も、子どもたちにとっては保育室と「おやま」を循環する動きになっていた、というように考えることもできません。本稿では、保育室内がどのようにして子どもたちの居場所になっていったかについては触れられませんが、自分の思いに従って保育室で過ごし、庭に出かけていたり、保育室と園庭を行ったり来たりする行為の中で、保育室の空間や園庭のどこにも変わらない自分であることを体で感じて、園の環境を自分の居場所として受け止められるようになっていったのだと考えます。

ここで、再度、『出会いの保育学』から引用させていただきます。

(津守真) 『居場所』というのは単なる物理的空間とは違います。人が生きる空間です。守られて安

心できる空間、一人でいることも人と交わることもできる。自分から出て行ってまた戻ることができるところです。

そこにいる人を信頼できるとき、自分の存在が確かにされるのです。その中で子どもは成長することができます。

子どもたちにとって、担任である私がいずれも信頼に値する存在になって、一緒に動いたり、子どもたちがいつでも出かけていって安心して戻ってこられるような循環する動きの基点になったりしていくことが、子どもたちの存在感、居場所にもつながっていくのだということを、一学期の子どもたちとの生活から改めて確信しました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

#### 引用文献

津守真・津守房江

『出会いの保育学——この子と出会ったときから——』

ななみ書房 二〇〇八年





# アフリカの学力調査からわかること

佐々木真千子



私は、アフリカ地域で行われている学力調査の研究  
をしています。<sup>注</sup>なぜアフリカなのかといいますと、

二〇〇〇（平成12）年に国連で「二〇一五年までに貧  
困をなくしましょう」という目標が設定され、日本も  
援助を行っています。最も貧しい地域であるアフリ  
カについては、子どもたちの学校生活があまり具体  
的に知られていないといわれているからです。研究者が  
学校や教室に入れてもらうのは大変難しいのです。

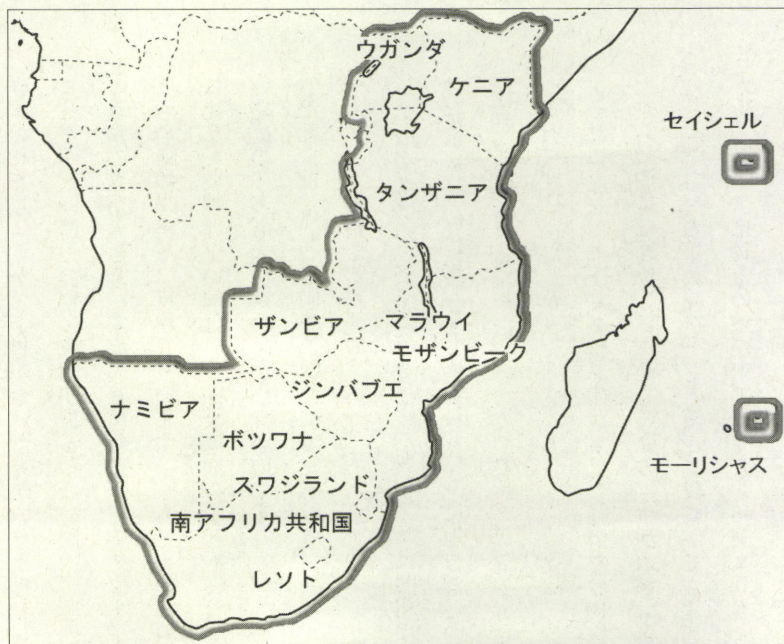
ところが、現地で行われている国際学力調査を見ま

すと、いろいろな質問項目に対する回答結果の数字の  
中に、質的に解釈のできる豊かな資料があることに気  
づきました。資料をていねいに解析することで、アフ  
リカの小学生の日常生活や教育成果の一つである学力  
が、どのような大人の働きかけや環境によって異なる  
かが見えてくるのです。また、これはアフリカの事情  
と限定するのではなく、海外の事情を知ることにより、  
そこから日本の私たち自身の姿を振り返ってみること  
ができるかもしれません。



まず調査の対象国を紹介しますと、アフリカ大陸の南東部、北はケニアから南端の南アフリカ共和国までの14か国です（下図参照）。一日一人当たりの国民所得は、中所得国セーシエルの19・5ドルから、0・40ドルのマラウイまで50倍近い開きがあります。これは近隣にありながら大きな差のように見えますが、もしアジアで同じような調査をしたとすれば、一日一人当たりの国民所得が100ドル近い日本のような高所得国から、やはり一日1ドル前後の国までであるという結果になります。それから見れば、50倍近い開きも驚くほどの大きな差ではないといえるのではないのでしょうか。

一日20ドル近い国では、ほぼ全部の家庭に電気が通り、テレビも九割がたの家庭にある一方で、一日1ドル前後の国では、大まかにいって、電気の通っている家庭が一〜二割、水道が





二割程度、屋根に雨を防ぐシートのある家庭は少なく、光源はろうそくやランプという生活です。なぜ国によって経済力が違うのかというのは大変興味深い点ですが、この地域では、工業をはじめとする付加価値の高い産業が発達している国よりは、概して鉱物・水産・観光などの資源をもち、政治の安定した国の経済力が高くなっています。

では、国の経済力が高ければ、子どもの学力は高いのでしょうか。ここが興味深いところですが、普通に考えれば、国の経済力が高く、設備が整い、家庭も豊かで教育にお金を多く使うことができれば、それだけ成績はよくなるのではないのでしょうか？そこで分析を行ってみると、意外なことがわかります。経済力が7位、10位、13位の国が成績ではそれぞれ2位、3位、7位と躍進している一方で、経済力が3位、5位の国が成績では8位、12位と後退しているのです。これは

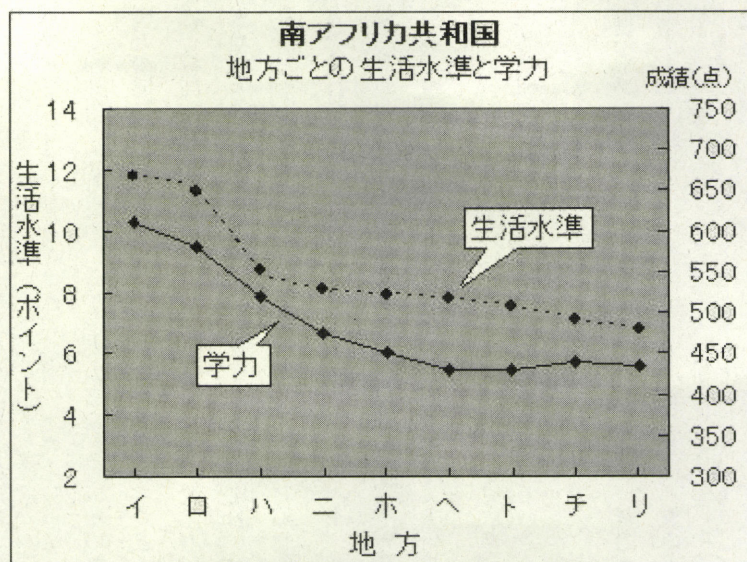
一体なぜでしょうか。予想がついた方がいるかもしれませんが、経済力の割に成績が振るわない国は、国内の貧富の差が大きく、家庭の経済格差が、そのまま子どもの成績の格差に反映しています。一方で、経済力に比して成績のよい国は、豊かな家庭の子どもと貧しい家庭の子どもの成績の差が小さいのです。

たとえば、二つの国を比較してみましょう。次ページのグラフを見てください。

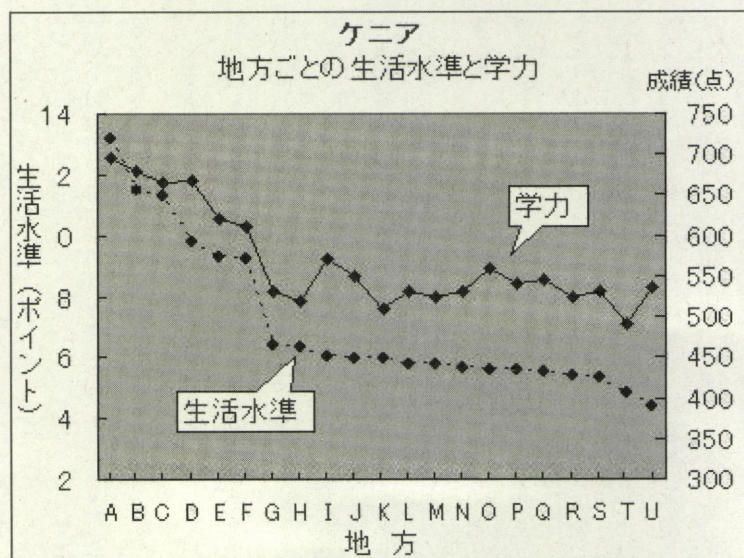
上のグラフからわかるように、南アフリカ共和国（経済力は3位に比して、成績は8位）は地方ごとの「生活水準」と「学力」の二本の折れ線グラフの傾きが並行です。

それに対して、下のグラフのケニア（経済力は10位ながら、成績は2位）は、地方ごとの「生活水準」よりも「学力」の折れ線グラフの傾きが緩やかです。しかも、ケニアは貧富の差が南アフリカ共和国よりも大きいのです。





SACMEQ データより作成



SACMEQ データより作成



では、このように貧富の差があるにもかかわらず、成績の差が小さい国があるのは一体なぜでしょうか。

この理由を探るために、子どもの成績と、ほかの要因との関係を細かく見ていくことにしました。たとえば、教師の特徴（成績、学歴、年齢、経歴、教え方、人数など）、教師が使用できる教材の種類（地図、辞書など）、学校の設備（図書館、テープレコーダーなどの機材やトイレの数など）、文房具（ノート、鉛筆、教科書など）、生徒の家庭の生活環境（本、電化製品、電気、水、家の素材、食事の回数、家で公用語を話すかなど）、行政の支援（視察官やアドバイザーの訪問頻度と内容など）と成績の関係を調べていきます。しかし、どれも満足のいく関係を示しません。教師の成績がよくても子どもたちの成績はむしろ低い場合があります。教材や学校の設備、文房具などは、無いよりはあったほうがよいのですが、無くても成績のよい国はあります。電化製品はおろか、電気・水道が無く

ても成績のよい国はあります。では、何が成績をよくしているのでしょうか。

それは、私の分析では、「家庭の関心」でした。「家庭の関心」というのは、子どもに、学校でやってきたことを聞いたり、習ったことを生活の中で使ってほしいと頼んだりすることです。どんなに教材が豊富でも、電気が普及していても、公用語である英語を話す家庭であってさえ、教育への「関心」が低ければ子どもの成績は伸びていません。

では、この「家庭の関心」はどこからくるかという点、実は親の学歴と関係があります。こう書くと、学歴の高い親の子どもは学歴が高くなるという再生産になると思われるかもしれません。ところが、学歴が高いほど「家庭の関心」が高いというわけではありません。このアフリカ地域では、親が「小学校を卒業していること」が小学校中退以下の学歴のみならず、中学校進学以上の学歴の親よりも「家庭の関心」が高いこ



とがわかりました。小学校を卒業していれば、基本的な読み書きそろばんができます。しかしそれでいて、何らかの事情（経済や内戦など）でそれ以上の上級校には進学できなかつたのかもしれない。親自身がいえなかつた希望や願望が子どもの教育への関心につながっている可能性があると思われれます。また経済社会環境も影響します。ケニアなどに関する別の研究では、国を挙げて学歴重視の風潮があるといえます。

……かつて日本も経済成長に懸命だった時には、そのような雰囲気があつたのではないでしょう。その善し悪しは別として、教育と将来の国の姿とを関連づけない人はいないでしょう。

私たちは貧しい国には、まず物資を送ることを考えます。教科書やノートや鉛筆などを充足させてあげたいと思います。しかし、子どもの勉強を伸ばすのは、物質ではないようです。「家庭の関心」がキーポイントなのです。むしろ「家庭の関心」を高めることは容

易ではありません。教育現場の方は、それができれば苦労はない、とおっしゃるかもしれません。しかしそれでも、小学校を卒業した子どもは、次の世代の自分の子どもも小学校に行かせようと考えているのです。従って、私たちはまず、いま小学校に通っている子どもが卒業できるようにサポートすることが重要でしょう。そして、国際教育援助は世代を超えた長いスパンで行うことが必要だと思われれます。

国際学力調査は、教育はすぐに結果が出ないということも示しているようですが、このような途上国も含めたほかの国との比較は、自国の政策について考える上にも有効ではないでしょうか。

（お茶の水女子大学大学院博士課程前期終了）

注 本稿の詳細については左記を参照されたい。

[www.sacneq.org/downloads/theses/Machiko\\_Sasaki\\_Thesis.pdf](http://www.sacneq.org/downloads/theses/Machiko_Sasaki_Thesis.pdf)



〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(43)〉

日常性から保育カリキュラムを考える(1)

## 附属幼稚園『しいのみパーティー』の姿から

宮里 暁美

お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」の「幼保」には、そもそも、大学と二つの附属園（幼稚園とナーサリー＝幼・保）の共同性を学部学生において育てようという目的と、そこからひいては各園の日常的な保育カリキュラムをよりよいものにしていく関係性が育まれるようにという願いとが二重に込められていた。しかし、このプロジェクトが始まった三年半ほど前にはまだ、この「幼保」は構想であり仮説に過ぎなかった。

しかし、「共同」が「協働」になるというプロセスとはこのようなものなのか、といまになって認識する。附属幼

稚園といずれみナーサリーは、子どもの生活の日常性を守るという基軸がぶれない。それは随時状況に即応して、考えられる最良の環境をつくり続ける運動態であるということだ。大学（外部）に在る者には計り知れない計画性と柔軟性をもっていた。園庭をはさんで隣り合う幼稚園とナーサリーの子どもたちの出会いも、その中で自然に（と見える仕方）で起こった。「幼」と「保」が深い体験として出会う協働の姿が、それぞれのカリキュラムの中に無理なく位置づいてきた。今回は幼稚園、来月はナーサリーからの報告である。

（プロジェクトリーダー 浜口順子）



## 子どもたちの声から始まるかわり

十月末、園庭にたくさんのシイの実が落ちた。シイの実を煎って食べることができる。子どもたちは拾ったシイの実を洗い、教師が鍋で煎るのを楽しみに待ち、こんがりと焼けたシイの実の皮をむいて食べた。その味は、子どもたちにはなじみの薄い味だったかもしれない。香ばしさの中に柔らかな秋の味わいが広がる。何より、自分たちが拾った実が食べられる、ということが、子どもたちの心を弾ませ、幼稚園には連日シイの実を煎る香ばしい香りが流れていた。

そのようなころに、子どもたちの中から「ナーサリーの子たちにも食べさせてあげたいな」という声が出てきた。集めたシイの実がたくさんになったので、『しいのみパーティー』をしようか、ということになり、「明日来てくださって誘いに行こう」

ということになった。

担任から頼まれた私は、数人の子どもたちと一緒にいずみナーサリーへと向かった。ナーサリーのドアをたたくと、K保育士が戸口に出てきてくれた。子どもたちの話をゆっくりと聞き「いいわね。明日行くね」と答えてくれた。それだけでなく「いま、お昼寝でみんな寝ているのよ。ちょっと見ていく？」と言って、中の扉を開けてくれた。お昼寝中のナーサリーは、特別の雰囲気で、子どもたちは抜き足差し足で歩きながら、小さい子どもたちの寝顔を見つめていた。

翌日、ナーサリーの子どもたちがお山の上から下りてくると、年長組の子どもたちは煎ったばかりのシイの実をごちそうした。堅い皮をむいてあげたり、ナーサリーの子どもたちがシイの実を小さな口に入れるのをじつと見たり、運動会で踊った「よさこいソーラン」を張り切って踊ったりする姿もあった。





▲勇ましい踊りを披露「見て！ かつこいでしょ」

ナーサリーと幼稚園のかかわりが、子どもたちの声から始まるということ、私たちはとても大切にしている。それは、時を積み重ねる中で子どもたちの中から自然に出てくる姿である。「誘いに行こう！」「知らせに行こう！」という声が子どもたちの中から自然に出てくるようになるためには、時を積み重ねていくことが何より大切である。

春、新しく入園した子どもたちも幼稚園に慣れ始め、園全体に少しずつ落ち着きが見られるようになったところ、お山の上で遊んでいるとナーサリーの建物を見つけて、「あそこは誰のおうち？」と聞かれることがある。「あそこには小さいお友達がいるのよ。いま何しているのかな？」と答えると、子どもたちは「ふーん」とうなずいたり、ナーサリーのドアをそつとのぞき込んだりしていた。春は、ナーサリーも新しいメンバーが加わる時期であり、ドアは閉じたままのことが多かった。



六月、幼稚園のじゃがいもパーティーにナーサリーの子どもたちを招待し、同じ時を過ごしたところから、ナーサリーのドアは、ノックできるドアに変わっていった。いろいろな時に、ナーサリーの子どもたちのことを思って行動する姿が出てくるようになり、「遊びに来て！」と誘うだけでなく「遊びに行きたい」という声も出てくるようになった。「黙って来てしまったようだから、一度先生に聞いてきなさいねと帰りました」という電話がかかってくることもあった。「おじゃまします」とあいさつし、ナーサリーの中に入り、しばらくそこで過ごしてきた子どもたちは、とても満足げな顔で帰ってきた。片づけを手伝ってとても感謝されたことがうれしい様子も見られた。このようなかわりを重ねる中で、楽しいことがあると「ナーサリーにもお知らせしよう！」という声が子どもたちの中から出てくるようになってきたのだと考へる。



▲「皮をむいてあげるね！ おいしいよ」



さまざまなやりとりの積み重ねが豊かなものになった背景には、ナーサリーと幼稚園の保育者が共通の思いをもっていたことがある。ナーサリーと幼稚園の保育者が共通にもっている思い、それは、子ども同士の自然なかかわりを大切にしよう、子どもの意欲を大切に受け止めていこうという思いである。

『しいのみパーティー』のお知らせをナーサリーに届けた子どもたちに「いま、みんな寝ているのよ。ちよつと見ていく?」と呼びかけてくれたK保育士の言葉からもそのことがよくわかる。後で、お昼寝中のナーサリーに入れてもらったことのお礼を伝えると、K保育士から「子どもたちが中に入りたそうな顔をしていたし、きつと顔を見て誘いたかったと思つたのよね。お昼寝中だから声はかけられないけれど、顔は見たいかなって思つて。少し変かな、とは思つたけれど」という答えが返ってきた。子どもたちの思いを大切にしようという姿勢が共通にある

ことを実感した答えだった。

幼稚園教育要領の中に、いろいろな人とのふれあいを経験させていく際の留意点として「自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみをもち、人とかかわることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること。」<sup>注</sup>という一文がある。いずみナーサリーと附属幼稚園の間で体験されていることは、まさに『自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験』ではないだろうか。そして、そのような体験は、双方の保育者が、子どもたちが自分の感情を素直に表現すること、自分の意志をもつて行動することを大切に支えていること、そして何より自然なかかわりの中で共感し合う体験を大切にしていることよつて生み出されているのである。





▲赤ちゃんに会えてうれしい子どもたち！

お昼寝中のナーサリーは、静かな寝息に包まれ特別の雰囲気があった。赤ちゃんの寝息を聞きながら、そーっと、お昼寝中の子どもたちの顔をのぞいた印象は、子どもたちの中に温かさと共に深く残っているのではないだろうか。温かさの印象、いとおしいと思う気持ち、それがナーサリーの子どもたちとのさまざまなかわりを通して子どもたちの中に残っていくものなのだと考える。

「大学の中心で赤ちゃんが笑う」という願いのもとで誕生したいずみナーサリーは、いま確かな寝息を立てて大学の中心にある。幼稚園の子どもたちは、その寝息をいとしく感じ取れる近さの中で生活している。「大学の中心で赤ちゃん子どもたちが共に笑う」という生活は、このようにしてゆつくり確かに積み重ねられている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園副園長）

注 「幼稚園教育要領」領域「人間関係」内容の取扱い（6）



## 編集後記

今月の倉橋特集のキーワードは、「うっかり」です。保育における「うっかり」の創造性といましようか、とても興味深く、読んでいて勇気づけられるようでした。

「ああでもない、こうでもない」の二元論の狭間でもがくのが、人間の常です。持続的なうっかり状態はそれを見えにくくし、人を頑固にしたり迷わせたりします。でも、瞬間的な「うっかり」によって、思わぬ関係性が切り拓かれたり、自分の考えを見直させてもらったりする場合も多いでしょう。「うっかり」は効果をねらえないところが、保育現場と相性がよいのだと思います。

さて、昭和29年から平成19年までの「幼児の教育」バックナンバーがネット上で追加公開されました。このページ下のURLからアクセスできますので、どうぞ！ (H)

## 幼児の教育 第109巻 第7号

平成22年7月1日発行  
編集兼発行人 浜口順子  
編集担当 金子めぐみ・田中恭子  
発行所 日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発売所 株式会社フレーベル館  
☎03-5395-6604 (編集)  
振替 00190-2-19640  
印刷所 図書印刷株式会社  
定価 550円 (本体524円)  
©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館  
表紙絵 後宮ひろみ  
扉題字 津守 眞  
本文カット 田崎トシ子  
編集スタッフ 高橋陽子  
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、  
フレーベル館までお願いします。  
☎03-5395-6613 (営業)

### ●次号予告

### 〈特集〉倉橋からの子どもたちへの伝言

コピソン珠子・松井とし

・緑蔭図書紹介 宮下美智代・西脇二葉

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

『幼児の教育』バックナンバーがネットでご覧になれます！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション”TeaPot”

<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

へ、アクセスしてください。

明治34年発行の創刊号から、現在、平成19年発行の第106巻まで公開されています。ご意見ご感想などは、[youjimap@yahoo.co.jp](mailto:youjimap@yahoo.co.jp)までお寄せください。



# 10年後も「選ばれる園」であるために

少子化時代の  
保育をリードする  
視点が満載！

## 次世代の保育のかたち

—幼稚園・保育所の可能性と限界—

吉田正幸／編著

### 認定こども園のチャレンジから 保育の未来を探る！

子ども環境が大きく変貌する現代において  
幼稚園・保育所に求められる機能が  
変わりつつあります。

10年後にも選ばれる園で  
あり続けるために

今、すべきことは何でしょうか？

認定こども園の5つのケーススタディと  
イギリスやドイツなど

海外の先進的な事例より、

近未来の保育のかたちを浮き彫りにします！

## 次世代の 保育のかたち

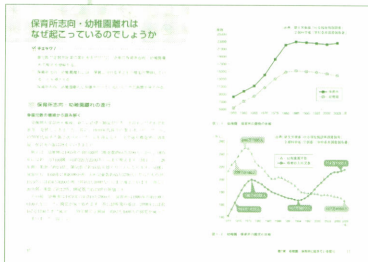
—幼稚園・保育所の可能性と限界—

吉田正幸 編著

認定こども園のチャレンジから  
保育の未来を探る

21×15cm 264ページ 定価 1,890円(税込)

10746



▲現代の保育事情、幼保の現状と課題を細やかに解説！

### Contents

はじめに

第1章 幼稚園・保育所に起きている変化

第2章 認定こども園の誕生

第3章 ケーススタディから探る保育のかたち

第4章 ヨーロッパの保育事情に学ぶ

第5章 幼稚園・保育所の未来の可能性

おわりに

参考文献



好評発売中

論文執筆・発表など、保育研究に必要なルールが1冊に！  
保育に携わるすべての保育者・研究者必携！

# 保育学研究倫理ガイドブック

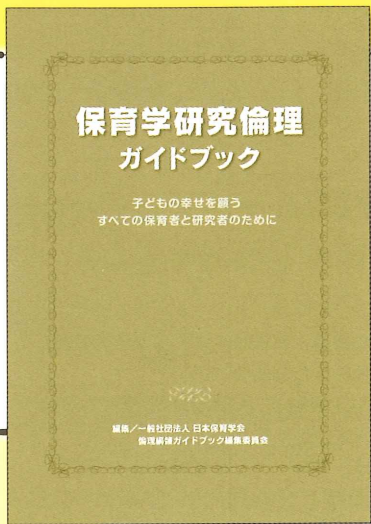
—子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために—

一般社団法人日本保育学会 倫理綱領ガイドブック編集委員会/編

保育学研究の指針となる倫理ガイドブックが刊行されました。保育学研究の心得を具体的な事例や用語解説などを用いて、わかりやすく、ていねいに解説します。

保育所や幼稚園など、保育現場の実践者や園にさまざまなかたちでかわり、研究をされている方々にお薦めします。

21×15 cm 96ページ 定価 1,000円 (税込)



10917

## ● 内容 ●

### 条文を解説&キーワードで読み説きます

#### 第1部 保育学研究における倫理

1. 保育学研究における倫理とは何か
2. 「日本保育学会倫理綱領」条文解説

### 気になるポイントを

#### 1項目 450文字程度でコンパクトに解説

#### 第2部 研究成果の発表と倫理

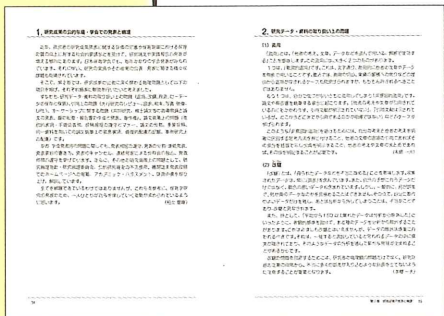
1. 研究成果の公的な場・学会での発表と倫理
2. 研究データ・資料の取り扱い上の問題
3. 引用上の問題
4. オナーシップに関する問題
5. 論文執筆上の問題
6. 学会発表時の問題
7. その他の研究倫理上の問題

### ケースごとに、2つの具体例を紹介

#### 第3部 保育学研究の実施と倫理の事例

1. 保育実践研究の実施における倫理の枠組み
2. 倫理の事例

#### 第4部 倫理の教育



定価 五五〇円(本体五二四円)☆

キッズブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。